



醉月菴逸人



張俊之

予能諧を産むるは蓮阿坊自尼あり何國の津浦に在り  
て子産陽をなし又今の世に何風と云ふものし  
人派を承て通し儒學の祖孔子能諧の祖蕉翁  
古葛菴の古書蓮阿坊星祭の句あり三士年の昔を思ひ七月廿五日  
國雙龍館に於て此翁の句に朕句造して多の雅人と交り温故  
知新の代思ひを採り此集を撰むるは阿坊也

文化十二年甲戌初秋日

尾張梅樹軒逸人謹書



岩橋

蓮阿坊

今とひのりり

さこの系す忍ぶ月の處置 逸人  
引流れ見之は忘る 龍橋 魯虹  
さひしれ地色の旅もたたく 旭支  
咲くさくさく夜をむすひにけ 彪蕪  
東風のそびく夜を明て来る 橘羅

行春の船 出に出一く  
奈賀世

津の舟 道本丹のひくし  
曾也

くれ枝ふと句の物の備ふれて  
近水

一道ひらく 音の夕榮  
きを

この舟の中ふと遊ぶ夢のちや  
聴松

意れ寂ふと又嶺 乃鐘  
桃堤

伊豫兼月の半片を吹く  
呂洲

鳴るる空しく 陣  
嵐峯

やきき灰汁桶の水汲みは  
八峯

松のむくの残る 阿  
湖曉

見るとちふ山を下りて花の毛  
躬貫

くふ極おの風は 兼  
紫缺

花人も若やく離れ氣ふかれや  
無得

機 嫌のふゆの刺の古き  
南嶺

藪外に飄の米ハミ 酔ふお  
支

奈良の通ひく 妹々 行神  
虹

つれづれのるは夕ぐれ恨めしき  
 柳は春の何れも春を  
 系さる利休のをとこ菊を傳  
 荒つらゝる山茶花のまを  
 八重垣も山崩さくさくありの春  
 虫おく志望の月の由りしき  
 業おれく身おもたのしき苦参川  
 捨し禮満の露おぬれつ  
 洲 堤 松 伊吉 世 也 燕 羅

一荒阿とあは空は雲あるを  
 江肺は傳はるもやせりさ  
 玉の照る翁は新えて  
 実也胡蝶の春とあはりめ  
 ちの遠見者目おれはと待  
 待ふまゝり色も伝ひぬる  
 峰 八 曉 貫 人 を

さしづめ

ニッ子も星れをを

逸人

たもひを隠すまひの蔭月

杉基

衣の走眉根うねつて丸寝しそ

さそ

笑けすまの水うねの菖

桃堤

八百目さしき笠酒と松竹若こもり

呂洲

茅の葉ふ色あうつひきの羽

骨切

春の風と浪は極る。二冬夏

伊吉

瓢と提くる。同宿

進水

いとと削戸の茶碗の作し

若也

水伝ひらくるけやせ

ふせ

船夜さや藤葉ふるちる月影

八景

圓けりけくをたねけり

嵐家

けしは夜気け針をワすも

若

我ハ酒中けり伝とさる

人

七律を系ふ調ふの竹の夏  
 花阿色さる草如下有  
 陽をを思ふ危如年持て  
 也すひ糸をさるる七来る  
 子おくして今ハ子安如地蔵守り  
 目お色ぬ香如面さる  
 すハさるハ如と浪  
 切ぬさるる鳥帽子の飯  
 旭支

堤  
 を  
 切  
 洲  
 舎童  
 堤  
 龍女  
 旭支

相坂の冥軸申の日如朝一  
 産光そんやと強くを  
 町へおぬるハ作るる  
 もと減るる采如目如角  
 かのしと阿残るる有安  
 牛さるる来て萩けあり  
 ひさく井をほも珍し  
 尻を薄めるる次  
 沙

を  
 童  
 沙  
 樵夫  
 堤  
 を  
 支  
 沙

もくろ小中々をれりふ人發 童

世を廣うれとある寺の鐘 紫絨

芙蓉の香ふ由に陣白のく人 大雅

は木焚しあうむく河織し 詠大

花さうと窓の外もむさふれ 渺

之夜と二夜とまう河の 離 支

来り秋也きく此隣もあふろ 洛 蒼虬

秋の凡今ハ見えたり 水外 艶 平松 亜溪

山鳥の尾ふ夜のゆて初阿ふし 志く

をく子れひくつて切の戸は 素律 三三不

さく續の塩に幸さく盆料理 鳥翠 一七

ひやくと浪れく来る石う那 夙也

吹ハ少くものし芝ふ秋の風 待亮 三カハ



このむしや一構りの露の虫 十六 星鶴

七夕や二人して漕水火弁 十七 巴陵

ちきりの根こけも思へ秋行ふ 洛 梅俣

秋の風馬んくぢや宇都か山 三六 義梁

霧まや八十八谷 水行たと 儿大

神婦や深山の香ハ何を亭 三六 白鷹

夕ぐれの浪ふきりり 秋れき 橘人

真木の葉をうら歌ひ 夜の秋の水 カ 半日房

朝を乃福ふ自し 旗の 奈ッ 石麻

待青や雲へかひく 穉 十六 蟻兄

朝良の孝子阿うき 穉 七 幽雅

あひくと日とくへる 花 十八 扇暑

菊いろく 蝶ハ白ふと白 アキ 蓬壺

啄木鳥れ 壺て去らじ 苔 洛 の 素童

山雀や 夢日 イセ 松のく 李東

夕鳥か とうけ エ下 粟兆

月を見し人も思ふも花也 樵夫

菫のふちをて見し月ハ何事ら西を 赤尾

秋風あつたまに花より露の露 桃堤

唐草——つとむる気も水 嵐嶼

秋風をそらふ水も水 紫絨

露草もをさむ——不破の板ひし 旭支

たち集る夜秋も水 龍女

雲一ツ何の神も 櫻籠 櫻堂

秋風ふ不二朝——人歌集 羅文

曇日や輝身見菴の露 鹿門

衣の露や一斤の露もあは 玄阿

和風や喰六海——蟹の阿 一壺

見らふの目もふあつて茅子の花 井丸

心もまきのふふも秋風うた 素虫

鼻の片へたをむ 知葉のひさき 上タラミ 可雪

見せられたも思ふ人 来思をこころ カ 白輅

秋文く神鏡清し 朝日影 カ 化蝶

扉の色ふくくさき 十六 水の方 十六 宝鼎

ついで来て 転載す カ 大や秋の風 十六 六合

秋来ぬく音 カ 大さけ 浪花川 カ 嵩平

人のあけ カ よし カ なる カ 花 カ 影 カ 杜高

大菊 カ 早くも カ 登る カ 朝日 カ 日 カ 掛良

伝留して花 カ 地を カ 房 カ の カ ひ カ とも カ 不 カ 格朗 タニハ

細くと カ 草 カ 壺 カ 烟 カ の カ や カ し カ け カ 色 カ 鬼洞 下

鴨 カ 突 カ け カ 是非 カ あ カ り カ ね カ つ カ 福 カ の カ 風 カ 茂良 洛

浪 カ ち カ る カ や カ 尾 カ 志 カ け カ き カ の カ 鴨 カ の カ 湖 カ 白民 ヒコネ

夜 カ る カ や カ あ カ へ カ く カ の カ 草 カ も カ こ カ さ カ 草 カ 篤老 下

赤 カ 通 カ け カ 浪 カ の カ 上 カ へ カ こ カ 何 カ 紀 カ の カ 風 カ 磯之 兵庫

槐 カ 書 カ や カ 湖 カ 水 カ の カ 走 カ る カ 日 カ 枝 カ お カ 流 カ 老圃

底 カ す カ へ カ 葉 カ と カ れ カ る カ 紅 カ 葉 カ の カ 成美 下

山鳥の尾とまつ夜と風の聲  
きこ

雅はほろ涼のふん秋のうれ  
彫花

すねきの月や葡萄の樹つと  
伊吉

佐の音や松風ふらふ萩の露  
可有

朝鳥や朝あけく乃玉も花  
湖暁

種あや芙蓉寺の法の丁志  
魯切

秋のうれきふふ人さし節の巻  
茶番

星合や 洛 高稚

これふも七夕折のひとよみ  
イセ 宗古

天の川 真美

山松も低くもあつり 天の川  
ハシキ 鳥頂

星の恋いさそへ月ハ入路小  
ナニハ 長齊

七夕や 莖堂

星合れ 由肆

茅の尻夜ハ吹阿けく浪川 ミナトナ 叡美

神もつ水も人声もや銀河 アキ 西坡

鏡も子も袖もきこや海 イセ 丘高

漢河見ても何ぞと湖の鳥 アツヒ 春雄

天のうそ草のくへも流 共傳 相宇

天河腹外をまてさるれ鳥 ラク 杜夢

人立や山家の宵も天川 タムラ 馬良

柳橋もさくく 洛 金葉

河ノ鳥もと宵一見のこの河 オホ 木僊

虫の音も夜し寝し回子れ月 友鳳

唐きひも雀も羽中も立明て 舎童

秋神もや捨てある河も虫の聲 近水

芒くも冒ハおるらうむしれ聲 八峯

神はや海もあれもの流来る 一紅

萩もれハ亀道出らう雨もれ 折風

隣さへ遠に花の かまへる家 佳隆

那息ふ今鬼し 夢をりきれを 故量

七夕や小きをさるる宵の夢 春人

杉蔭に露のかさむや 芝 青 山夫

山寺を尋て 花をまの 夜ふの 青風

世は月尔思ふる 家しけり 満夫

迹水をとるへんとすれハ秋ハ 呂洲

比丘比丘尼梵論も 葡萄の垣邊 木々丸

花の取々ふもさるる 桐一葉 井眉ナニ

まの宵ふたうれ 色しきりしを 千影チカミ

此人も落口と色うれハ秋ハ 干當チカモト

二月月也出さして 春の菫の家 春起フキ

秋之也 ほろり同光 子の笑ふ 出栢タニ

水も入果ハらるる しみじみ 仙洲シム

福毎也 思ふるも 小松明 沾香ハキ

虫の音の中を流るる地川サラム 琴州

菰草く風先暗く底にうらむ セムタイ 三友

灯籠の二夜さあけ 清く香 カフチ 朱杞

祢之ぬハ齒ふも志をり虫の色 藍雅

横雲ふさふさあつて虫の丁急 素亮

小籠の光をわらわし祢の凡 無得

蕨草のしゆく嵐の戸口ふら 芳文

竹ひしつあゝ振る地をうらむ エト 素玩

柳枝や束ねてもろろ萩少終 カ 固来

松のつやも寝ねはくしゆく オホ 吉豊

ふささりのあそとこしめや宿のあ フクミチ 藏六

七夕のしつ輝ふも几楊あ ヒタ 京眉

三日月の夜も神の草花露 ツチキ 梅亭

る言やたしひ定てちる 芙蓉 ツキ 凡鳥

紫田や月院うりる峰の雲 エト 鬼洞

水うこまし氣は河へりる漢河、笠齋

山月れ、然もあそりり臭の市 リニ 吞龍

芝原とわそりもせ痛とさう然の苗 シモラサ 蒼嶽

八羽や腹うへまゝの渡をもと名 エト 松夫

みそ花の然ハ小まや一伏了場、可磨

悦庵の然ふちすあをさ取へ 三ノ 白度

青のの院のあへそ天河 オハ 屋鳥

きまてうれハ野へりるの彼 オハ 南嶺

月を宿友や河をけりきりく 三ノ 里談

彼もしとらへをまこりむ オハ 少足

朝鳥や菴外祝のかま オハ 草齋

あさうの言へる花のち イツモ 花叔

朝鳥へりるやも桶の水 トホタフミ 蕨化

朝顔の色もその見 オハ 繁祐



秋のうれ 黙してとめさし山より  
橘良

ちとほへ子も 夢をこり 是相撲  
大雅

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

花すれめし 山より 山へ来  
十丈

夜長しりたも小指の拍子か 路六

夏腐羅密の末の神をさへ 已伯

初秋の氷も流る蟬の音 若也

鶴の来てハ身振ひくも旁の松 新夷

月影の松目やうる見ゆし 信中

一面の清くやもやは桔枝 貞尾

かゝぬらぬ雲も心や神阿比 卯渚

露と雲と秋の明くれりる 少女

霜かた文やきりれハと信石 万和

紫の香るかもしえのす竹 雪風

梅橋ももてく 津の秋 桃之

くまひきの雲もも残の暑う 武陵

けさ盛るけさひしきやきの燈籠 圃文

ちと涼くと朝日の布くまうれ 和松

今うれの秋もはじき 菟音

八月の田畑ふくく〜雀う歌

スウ 雲香

井竹葉の今朝の旁ある。常くお

イセ 交齊

申しこはそ野寺の鐘也。涼の玉

林古

民安や七夕暇乃。桐一葉

ニ下 國村

涼さるく小亭の盆の月夜は

洛 鳥印

足取ふもや壺を流しや。菫の乃

ナハ 寄淵

杉さひや。脊戸ふ有る。愛の乃 逸人

梅樹動乃。〜俳諧の海のハ〜  
ちを上げ子尋の底ひを極てたへ  
那の口つきよ。朝ふ夕ふよ。来り。浪の  
文つ〜ひも〜え。海をたを志しひ。學ひ子  
何難うれらひ。寄まの。〜  
双龍館ふ。おま。〜真玉の。〜  
照さ。〜その。破字の。〜  
浪の。下。藻ふ。〜  
ま。〜

十六  
すの巻のふらねもひよひれ  
大人。場事ふつてもあれ。たのまひ  
書けよ。此のまゝの一言と云ふ  
すの

松の巻  
かゝる

尾張  
梅樹逸人撰



